

## ハムスターチェキと老犬フレンダー

天城町立天城小学校 4年 杉山 美波

ジャンガリアン・ハムスターのチェキは、あるペットショップで売り出されています。チェキは男の子で好き心おうせいな、元気いっぱいの明るいせいかくでした。チェキは、

「ああ、つまらない、つまらない。」

と、いつも言っています。いくらおいしいエサや遊び道具があっても、せまいケージの中からでられないなんて、だれだってつまらなくなります。

でも、ここにいるチェキ以外のハムスターは、それでもいいと思っているみたいです。けれどもチェキは、ケージから出たくて出たくてたまりませんでした。

そんなある時、チェキはとうとうケージを開けることを覚えました！！そして、もちろんにげ出しました！！とにかく前へ前へ進みました。横だん歩道をわたり、人間の足元を急いで通りぬけ、そして、とうとう草や木がいっぱいある所に着きました。そこは森の入り口でした。チェキは、知らずに5～6歩、ふみだしました。するとその時、大きな茶色いものがチェキを見下ろしていました。チェキも不思議そうに大きな茶色いものを見上げました。すると、急に、大きな茶色いものが口を開きました。

「お前は、野ねずみかい？」

それを聞くと、チェキは、ムツとして、

「ちがうよ。ぼくは、ジャンガリアン・ハムスターのチェキだよ。ペットショップからにげだしてきたんだ。」

「フム……。そうか。ハムスターか……。」

「君こそ、だれさ？」

「わしか？種類はわからんが、犬じゃ。名前はフレンダー。」

「犬か……。ふーん。」

チェキは、ペットショップにいた生き物を思い出しました。

「お前は、森での生き方を知っとるのか？」

「全然、知らない。」

「じゃ、わしについて来るのじゃ。森での生き方を教えてやる。それにわしと一緒にいたほうが、安全だろう。」

チェキはだまってついて行きました。そして、また、フレンダーが口を開きました。

「まず、最初に探すものは、安全なねどこと飲み水じゃ。まっ、森や林ならすぐ見つかるがのお。ほれ、わしの水飲み場じゃ。」

そこには、きれいな川がさらさらと流れていました。チェキは、

「わぁ、きれいだなあ。」

と、思わずさけびました。

「じゃろ？川というものは便利じゃ。川にそって行けばいろんなところに行き着く。それに、わしが食べる魚があるしのお。」

「でも、ぼくの食べ物は・・・？」

と、チェキはフレンダーを見上げました。

「ぼくの食べ物は魚じゃないんだよ・・・。」

「そんなの分かっとる。お前の食べ物は、種や実じゃろ？森だから、そんなもんはいっぱい転がっとる。でも、森には他の生き物も住んどるのだから、気を付ける。自分のことは自分でやるんだ。」

チェキは言われた通り、そこら辺に転がっている木の実や草の実を食べました。フレンダーはその間に、魚をとって食べました。こうしてチェキは、ペットショップからにげ出して、フレンダーとくらし始めました。フレンダーはとても物知りで、チェキにいろいろな事を教えてくれたり、森のたんけん連れて行ってくれたりしました。ある時、チェキはこんなしつ問をしました。

「ねえ、聞いてもいい？フレンダー。」

「何じゃ。」

「フレンダーは、初めて会った時は、『自分の事は自分でやるんだ。』って、言ったよね？じゃあ、どうしてぼくの事をめんどろみてくれたり、いろんな事をしてくれるの？」

フレンダーはしばらくだまっていたましたが、言いました。

「強い者が弱い者を助けることは当たり前の事じゃ。人間でも動物でもみんな兄弟のようなものじゃからな。」

チェキは、フレンダーの役に立つ事などできるのだろうかと思いました。でも、そんな事を考えていてもチェキは幸せでした。のどがかわけば川の水を飲み、おなかがすけばそこら辺りにある木の実や草の実を食べ、ねむくなればやわらかくて温かいフレンダーのそばでねむりました。フレンダーさえいればこわいものなしです。これこそチェキが求めていた、自由で幸せなものでした。

秋になると、クリだのドングリだの松ボックリなどが山ほど落ちています。フレンダーは、

「今のうちに、リスどもに取られんように、実をとっておけ。」

「どうして？」

「冬には実がならんから、何も食べられないのじゃ。」

「フレンダーは？」

「魚は冬でもいるから大じょうぶじゃ。」

それでチェキは、冬が来る前に一生けん命木の実や草の実などを探して、見つけては、ねどこに持ち帰りました。

やがて、冬がきました。植物はかれ、雪が積もり、実などは一つも落ちていません。そのころからフレンダーは、病気にかかり、具合が悪くなってきました。チェキは、フレンダーから習った事で、できるだけの手当てをしました。くるみのからで水を運んだり、薬になる草を魚と一緒に食べさせてあげたりしました。でも、フレンダーは、日に日に元気がなくなって、やせおとろえてきました。ある日、チェキはしょんぼりと木の根にこしかけました。そのうちに、ふと、あ

る言葉がよみがえってきました。

「強い者が弱い者を助ける事は当たり前じゃ。」

それは、ずっと前、フレンダーがチェキに言った言葉でした。チェキは、

「今度は、ぼくがフレンダーを助ける番だ。」

そう思いました。そしてチェキは、かけ出しました。走って、走って、走り続けて気が付くと大きな木の家の前に着きました。その家の前の切りかぶに、やさし

そうなおじいさんと、男の子がすわっていました。チェキは男の子の前に行って、

「キュ、キュ！！チューチキュー！！」

と、せいっぱいの声でさげびました。

「あっ、ハムスターだ。」

と、男の子が気付きました。そして、つかまえようとする手をチェキはすりぬけ、もと来た道を走りました。男の子は、

「あっ、待ってよ！！」

と、チェキの事を追いかけてきました。おじいさんも、

「これ、待ちなさい！！」

と、えっちらおっちら追いかけてきました。チェキは、この人たちならフレンダーを助けてくれると思ったのです。そしてやっと、フレンダーのいる所に着きました！！そしてまた、せいっぱいの声でさげびました。男の子は、フレンダーに気が付いてくれました。そして、おじいさんをよんで言いました。

「おじいちゃん、見て！！犬だよ！！具合悪そう。連れて帰って手当てしてあげようよ！！」

こう言って、チェキも連れて行ってくれました。おじいさんは木こりで、男の子の名前は、ジョンといいました。こうして、フレンダーはおじいさんたちにかん病され、病気もよくなりました。チェキは、フレンダーが元気になってとてもうれしくなりました。それからチェキはしみじみと思いました。

「強い者が弱い者を助けるのは当たり前じゃ。それがぼくにもできたんだ。」

と。

